

k 英語による人間関係の崩壊及びその対策

この論文は人が話す言葉、この場合は英語、を分析し、その人間関係への影響を考察しようとするものである。この試みを容易にするためにコンピュータを思い浮かべて欲しい。私はコンピュータ内の全てのプログラムを動かすコンピュータ言語と、人が話す母国語は類似していると考える。母国語は、個人の価値観や考え、技術やコミュニケーションへの努力等といった、人間のプログラム全てを動かす言語、すなわちコンピュータにおけるコンピュータ言語と同様の働きをするのだ。

言語に目を向けてみると、それが我々の生活すべての側面に影響する重大なプログラムであるということは明らかだ。言語を通じ、我々は考え、人間関係を経験し、自身と世界を理解する。しかし、我々は無意識にこれらのことをするので、言語の我々の生活への影響は極わずかにみえる。言語プログラムの目的やデザイン、個人の生活への影響について、誰かが実際分析したことがあるだろうか。私の経験上、人間関係に問題が生じた際、人は自分か他人、もしくは両者を非難する。アメリカ合衆国では、この非難の過程を通じ、非常に多くの離婚が招かれている。もし、彼ら自身、もしくは相手が対立の原因だと結論付けるのではなく、彼等の言語プログラムが人間関係を損なう原因だった、と結論付けたとしたら、結果はどうなるだろうか。

コンピュータにおきかえてみると、個人が非難しあうということは、コンピュータ内の特定のプログラムがうまく操作しなかったことを非難しているようなものだ。正常に動かないのが特定のプログラムなら、コンピュータそのものを捨てるというのは意味をなさないだろう。我々人間はコンピュータのように、お互いのプログラム（例えば価値観）を通じて操作したり影響しあったりする。英語を話す人間の場合、うまく動かないのは人間ではなく、本来デザイン的に欠陥がある言語ではないのだろうか。言語デザインの限界が、英語を使ってコミュニケーションしようとするとき、支障をきたす原因となるのである。特に、私は、英語は人間間のコミュニケーションのためにデザインされたのではなく、むしろ問題を解決するために、情報を集め、操作し、また計算できるよう厳密にデザインされたということを論証していきたい。

言語学者は、言語が人間をコントロールするのではなく、人間が言語をコントロールする、と言う。なぜ彼らは言語が人間関係に影響する可能性を否定するのだろうか。文章のデザインは言語プログラム固有の現われではないのだろうか。文章のデザインが人の話し方をコントロールすることはありえないのか。我々全てが同じような状況では、俗に言う『ダウンロードされた』文章を使っているのではないか。

少なくとも私の経験からは、人は皆、文化的に同じように話しており、客観的に見ても、文章と人間関係のあり方には相関性が見られる。よく見てみると、人々が使う文章とその使い方は彼等の前向きな動機に関わりなく、その意向をいつの間にか害しているのは明らかだ。その人の目的が気配りや関心、愛情を表現する時ですら、それを表現する際の文章は、実際には不調和と混乱を促進する。もしコンピュータのプログラムが目的を満たさず、うまく機能しないなら、私は他のプログラムを探すのではないか。確実に、もっと良いプログラムを探すだろう。もし、今使っているプログラムが私の仕事をだいなしにするなら、私は他の生産的なプログラムを見つける前でも、直ちに現在のプログラムを使うのをやめるだろう。現在の英語のデザインでも同様である。続けて使うことにより、より多くの不調和と混乱を引き起こすだけだ。このことを真剣に考えた方がいい。使うのをやめるのだ。そして理解しあうのに効果的な言語プログラムの開発に集中する道を選ぶのだ。これは私が何年も前に決心したことだ。英語を話すのを止めるのではなく、より効果的な言語プログラムを開発することを選んだのだ。

私が自分自身に問いかけたのは、現在英語で使われている文章を使用している他人と理解しあえないのなら、新しい言語プログラムを使ってなにを伝えたいのだろうか、ということだ。答えは、人間関係における安心、愛、そして調和だ。それから私は、もしそのような幸福な感情が促されるのを手助けできるのなら、私自身がどんな文章を作れるだろうか、と考えた。その結果、同じ文法と語彙を使いながら、別の文章パターンにはめむことによって、私は実際に愛情、無制限の愛情ですら、会話の中でうまく表現することができる文章を創り出したのだ。私はこの新しい英語プログラムを『パーソナルイングリッシュ』と呼ぶ。この英語プログラムは、使うことにより、心の平安や愛情、調和が促進されるようにデザインされている。さらに感情的な傷を癒す助けともなる。

その目的とデザインから『テクノロジカルイングリッシュ』と私が名づける、現在の英語プログラムを考察するのは有益だろう。それは、しかし、その前に、私は読者の皆さんに、この二つの英語プログラムの違いをより明確に理解していただきたい。そのために、以下に、二つの例、現在使われているテクノロジカルイングリッシュ、そしてより効果的なパーソナルイングリッシュの対話を挙げた。さらに、第三の例として、二つの言語プログラムが融合した例を示した。

二つの言語プログラムの融合概念をより完全に理解するためには、適切な時期に、ある特定の目的を持った母国語は、別の特徴を持つ言語プログラムと融合され得るという認識を人々が持

たなければならない。これはコンピュータのプログラムが個別であってもそれぞれが合併し得るということと似ている。この論文では、人間関係における感情の共有による意思疎通の必要性をテクノロジカルイングリッシュから裂き取り、その機能をパーソナルイングリッシュへ移し変えている。この方法では、二つの個別の英語言語プログラムがあることになる。テクノロジカルイングリッシュがコンピュータのスプレッドシートプログラムのような問題解決型のプログラムで、パーソナルイングリッシュがコンピュータの言語処理プログラムのような感情言語型のプログラムなのだ。

以下の三つの例を読むことで、話し言葉である二つの言語プログラムの概念を発達させる価値を理解、統合する助けになるであろう。

例 1

A. テクノロジカルイングリッシュの会話

子供を学校へ迎えに行く際、親は強い関心をもって、“Hi, How was your day?” 「今日はどんな一日だった？」と尋ねる。

“Fine!” 「楽しかったよ！」子供は答える。

“How was school?” 「学校はどうだった？」親が尋ねる。

“OK.” 「よかったよ」子供は口籠もる。

親はやや不満そうに尋ねる。“Well, what did you learn?” 「じゃあ、何を習ったの？」

」

“Nothing.” 「なんにも。」小声でいう子供。

親は気をそがれ、動転して言う。“Hey, what’s the matter? Are you OK?” 「まあ、どうしたの？だいじょうぶ？」

疑い深くなった子供は、“No, there’s nothing wrong. Why?” 「なんでもないよ。どうして？」と答える。

おおいに失望させられた親は答える。“Why? I asked you “what did you learn?” and you said “Nothing.” You can’t mean you didn’t learn anything today. You must have learned something.” 「どうして？お母さんが『何を習ったの？』と聞いたとき、あなたは『なんにも』って言ったじゃない。なんにも習わなかったなんてありえないのよ。なんらかは習っているはずよ。」

B. パーソナルイングリッシュの会話：

子供を学校へ迎えに行く際、親は “Hi honey. I’ve been looking forward to picking

you up since I heard that the surf is coming up. I can't wait to get down to 34th St.”「〇〇ちゃん、いい波がきていると聞いてから、迎えに来るのが楽しみでしかたなかったのよ。34番通りに行くのが待ち遠しいわ。」と言う。

子供はにこやかに見上げ、言う。“Radical.”「やったー。」

親は子供に微笑み返し、サーフボードを取り、着替えるために家へ向かう。その道中、親は“I've had a very busy day, you know, trying to get all my work done so that we could go surfing together.”「今日はとても忙しかったのよ、仕事を全部終わらせようとしていたからね、そうすれば一緒にサーフィンにいけるでしょ。」と言う。

子供は答える。“Yeah, school was tough too. Mr. Johnson gave us a ton of homework and so did Ms. Kimble. Don't these teachers have anything else to do?”「そうだよね、学校も大変だったよ。ジョンソン先生がすごくたくさんの宿題を出したんだ。キンブル先生もだ。先生達は他にすることがないのかな。」

親はうなずき、関心を持って言う。“It feels unfair to have to be at school all day and then to be given work to do at home.”「一日中学校にいて、家でも宿題をしなければならぬなんて、不公平を感じるわね。」

“Yeah!”「そのとおりだよ！」と子供が言う。“It's like if you had a boss that was always giving you work to do at home. You only get paid to work 8 hours and then they work you for free at home.”「家での仕事をいつも与える上司がいるようなものだよ。8時間分のお給料しかもらえないのに家でただで働かせるんだ。」

“Yes.”「そうね。」親が答える。“Children do seem to be worked too hard.”「子供は一生懸命勉強させられすぎみたいね。」

例2.

A. テクノロジカルイングリッシュの会話

親が子供に尋ねる。“What would you like to do today?”「今日は何をしたい？」

子供は興奮して答える。“Can we go to Disneyland?”「ディズニーランドに行ける？」

」

“No,”「だめよ」親は答える。“That's too expensive.”「高すぎるわ。」

“Then can we go to Sea World?”「じゃあ、シーワールドに行ける？」と、子供が尋ねる。

親は少し不満そうに、“No, we can't go there either, because those kind of places cost too much. Where else would you like to go?”「だめよ、そこにも行けないわ。その手のところは高すぎるからね。他にはどこに行きたい？」と聞く。

子供は少し考えてから “How about the zoo?” 「動物園はどう？」と提案する。

親は少し困って言う。 “No, that’s too far. Do you know how much gas costs to go so far? Come on, you must have a suggestion that we can do. Think!” 「だめよ、遠すぎるわ。そんなに遠いところに行くのに、どれだけガス代がかかるか知っているの？さあ、私達ができることが何かあるはずよ。考えて！」

子供は元気なく答える。 “I don’t know. We can go wherever you want.” 「わからないよ。お母さんの行きたいところならどこでもいいよ。」

B. パーソナルイングリッシュの会話

土曜日の朝食時、子供といっしょに席につき、何やら考え込んでいた親が大きな声で言う。 “There’s so many things we can do today. I like going to the beach, or bowling, or to the movies. Hmmm, but I’m kind of unsure what else we might do. I think I need some help thinking of other things to do.” 「今日は、いっしょにできることがたくさんあるわ。お母さんはビーチに行ったり、ボーリングに行ったり、映画を見に行ったりしたいわ。そうねえ、でも、他に何ができるかしら。ちょっと考えてくれないかしら。」子供の目が輝き、 “How about rollerblading, or going down to the Fun Zone to play videos?” 「ローラーブレードはどう？スケートボードは？ビデオゲームをしに、ファンゾーンに行くのはどう？」と言う。

親は微笑んで答える。 “Those are great ideas. I wonder what else we can do?” 「みんないい考えね。他には何ができるかしら？」

子供は熱中して答える。 “How about going to a baseball game, or Knotts Berry Farm or Disneyland?” 「野球を見に行くのはどう？それとも、ナッツベリーファームかディズニーランドは？」

親は笑って言う。 “So many great ideas. We’ll be able to do one or two of these ideas today, and some we’ll save for the next few weeks.” 「いい考えばかりね。今日はそのうち1つか2つをしようね。あとはこの次にとっておこうね。」

“Can we go to Disneyland then?” 「じゃあ、ディズニーランドに行ける？」と、子供が尋ねる。

“Going to Disneyland would be a lot of fun, and that’s some place we have to save for a special day. Probably we’ll be able to go there at the end of the month. Now, for today, we have a choice. We can either go rollerblading and to the movies, or to the beach, but I don’t know which we should do. I can sure use some help deciding.” 「ディズニーランドはとっても楽しいから、特別な日のためにとっておかなくちゃならないわ。たぶん、今月末には行

けるでしょう。じゃあ、今日は、ローラーブレードと映画か、ビーチに行くかのどちらかにしようね。どちらがいいかしら。誰かが決めるのを手伝ってくれるよね。」

子供は少し考え、“Let’s go rollerblading and then a movie. We can go to the beach next week.” 「ローラーブレードをして、それから映画に行こう。ビーチには来週行けるよ。」と言う。

親は励ますように言う。“Thanks. That really helped. Yes, going rollerblading and then to the movies is the perfect idea.” 「ありがとう。とても助かったわ。そうね、ローラーブレードをして、映画を見に行くのはすばらしい考えね。」

例3

以下の会話は二つの言語プログラムを使うことと、うまくコミュニケーションするためにそれらを統合することを学んだ際の力を強調したものだ。

子供が言う。“I hate vegetables. I’m not going to eat them!” 「野菜なんて大嫌いだよ。もう食べないよ。」

親が答える。“It seems tough to have to eat them.” 「野菜を食べなければいけないのは大変そうね。」

子供が答える。“So why do I have to eat them?” 「じゃあどうして食べなくちゃいけないの？」

親はその状況での実感をこめるため一呼吸置き、言う。“Because I feel inadequate as a parent unless I provide a well balanced meal.” 「バランスのとれた食事を食べさせないと親として不適切だと感じるからよ。」

子供は親の答えにやや驚く。そして尋ねる。“Why did you give me brussels sprouts? I hate them.” 「なんで芽キャベツを出したの？大嫌いなのに。」

“Because” 「なぜって、」親が答える。“They were on sale.” 「安売りしていたからよ。」

“Well, how cheap are they if I won’t eat them?” 「もし僕が芽キャベツを食べないんだったら、どれだけ安くつくと思う？」

親は率直に言う。“Well, I never thought about that.” 「あら、それは考えたことがなかったわ。」

“Anyway, how many times a week do you think I need to eat vegetables so that I don’t get sick? That’s the reason I have to eat them, right?” 「とにかく週に何回野菜を食べれば病気にならないの？それが野菜を食べなくちゃいけない理由でしょ？」

親は少し考え、答える。“At least twice a week.” 「最低でも週 2 回ね。」

“So,” 「じゃあ、」と子供は言う。“Why don't you give me what I like twice a week, definitely not brussel sprouts. You'll eat what I like, and the other five nights you can have what you want, and in this way you get vegetables seven times a week and I get them enough not to get sick, and we're both happy.” 「週に 2 回は僕が好きなものをちょうだいよ。絶対芽キャベツじゃないよ。お母さんも僕が好きなものを食べるんだ。そして、あとの 5 日の夕食はお母さんが欲しいものを食べられる。そうすればお母さんは週 7 日野菜を食べられて僕も病気にならないくらい野菜を食べられるから二人とも満足するわけさ。」

親は微笑み、言う。“That was brilliant. I would never have figured that out in this way. Thanks a lot. That was great!” 「それはすばらしいわ。お母さんにはそんな風には解決できなかったわ。ありがとうね。すごいわ。」

この例では、2つの言語プログラムが満足いく形で統合され、2人の感情が十分に交換され、なおかつ、問題が解決された。健康的な人間関係には安心して感情を表現し、感謝と信頼を育て、問題をも解決できる、多様な言語プログラムが必要なのだ。

この2つの言語プログラムをより完全に理解するために、まず、私がテクノロジカルイングリッシュと呼ぶ我々共通の英語について、目的とデザインを探求したいと思う。

我々の言語は、科学技術が進んだ社会の要求を満たすためにデザインされている。言語はコミュニティの価値やゴールに向かって実践するために組み立てられている。そこで問われるのは問題解決における適切な出発点であり、問題解決は科学技術社会の得意とするものである。問題解決は我々の社会の柱である。当然、我々が話す言語はこの過程を最大限簡単にできるようデザインされている。質問は情報とデータを生じさせる。このデータは収集され、記憶され、処理され、問題への答えを展開させるために使われる。科学技術言語としての英語はこの過程においてきわめて有効なのだ。アメリカ合衆国が遂げてきた途方もない科学的発展に証明されるように、英語はことによると最も強力な科学技術的な言語の形である一方、人間性のコミュニケーションに使われるときには、ほとんどまったく効果のないものなのだ。問題なのは、誰もこのことを知らず、このことを知らずに、皆が、事実上人間関係を崩壊させる科学技術言語の英語を使うことだ。

テクノロジカルイングリッシュはどのように人間関係を崩壊させるのだろうか？科学の基礎に影響を及ぼしているテクノロジカルイングリッシュでは、まず、自然の秩序は人間の繁栄に対

する脅威であると言明される。すなわち、自然はあるがままの姿では充分ではない、とされるのだ。この仮説をもとに、テクノロジカルイングリッシュは自然のような全体的で完全なものを構成要素に分類し、操作し、再設計し、なにか有用で機能的なものに再び組み立てられるようにする。科学の影響を受けているため、テクノロジカルイングリッシュはすべての作用に対する、『作用、反作用の法則』にのっとり働く。そのため、成功や失敗に伴う報酬や懲罰を用いて人をコントロールし、よりよい効果へと期待をかけるのだ。テクノロジカルイングリッシュは人間関係から個人の感情を取り除くことを基本として働くのだ。

テクノロジカルイングリッシュを人間関係に適用することは対立を強いる。それは極度の不快感を引き起こす。なぜなら、この問題解決型の言語プログラムを選択の余地なく用いることにより、第一に、我々は無意識のまま、他の人々、ありのままでは充分良くはないとされる人々、とコミュニケーションしているからだ。次に、問題解決者は質問し、多くの場合答えを強要し、不備を分析しようと試みるからだ。結論に至ると、問題解決者は一連の提案を通じ、解決を強いる。批判や解決策の強要はそれを受けた人にまるで自分が裁かれたような感情を生じさせ、それは怒りという反作用を引き起こす。このように、状況は非常に対立したものとなる。助言を受けた者は、助言者の問題に対する判断や批判、解決策の強要に対して不満を表現することにより、助言者を失望させる。一方、助言者は助言を受け入れないのは受け手の感情がバランスを欠いた状態だからだと正当化する。この崩壊は人間関係のためのコミュニケーション手段としてテクノロジカルイングリッシュを用いた結果である。

テクノロジカルイングリッシュの微妙な複雑さを理解し始める最も簡単な方法として、復習の意味を込めて以下の状況を掲げる。この例では、親が放課後に子供を迎えに行き、いっしょに出かけるところだ。学校に着くと、親は子供を車に乗せ、“How was your day?”「今日はどうだった？」と尋ねる。子供は“O.K.”「まあまあ」と答える。子供はそれ以上何も言わず、窓の外を眺めている。次に、親は“How was school?”「学校はどうだった？」と尋ねる。子供は“Fine.”「よかったよ」と答え、学校から帰る途中ずっと窓の外を眺め続けている。今度は、親は“Did you learn anything?”「今日は学校で何か習ったの？」と聞く。子供は親を見て、“No, not really. Can we get something to eat?”「別に、何にも。何か食べ物を買っていい？」と言う。親は子供の方を見、他に何を話せばいいのか考える。

以上の会話は多くの子供達が毎日繰り返している、ある種の文化的で慣習的な会話だ。親がいつも同じ質問をし始め、アメリカの子供達は全く同じ返事をする。たいてい、この短いお決まりのやりとりが終わるのは、親が“Well, great.”「そうね、それは良かったわね。」と言って

、会話を終わらせる時である。そして子供はたいてい“Can I go out and play now?”「もう外に行って遊んでいい？」と尋ね、親が“Yeah, but make sure you do your homework before too long, OK?”「いいわよ。でも、遊びすぎないで、宿題をするのよ。わかった？」と言って、締めくくる。

この会話を見てみると、確かに何か少しおかしい。親が、子供が何を学んだかを聞いたときに得たのは、否定的な、何も学んでいないという答えだった。親は躊躇せず子供を外で遊ばせてしまうので、そのことに関心がないように見える。これは興味深く、難解だ。では、この答えとなるダイナミクスを見てみることにしよう。

まず、このダイナミクスを理解するために、別のよくある会話を見てみるのが重要だ。ある人がショッピングモールを歩いていると、知り合いを見かける。その人は親しみをこめて、“Hi, how are you doing?”「こんにちは。元気？」と話しかける。話しかけられた人は“Fine, how are you doing?”「元気だよ。あなたは？」と答える。最初に話しかけた人は、“Great, take care.”「とても元気だよ。元気でね」と答える。親と子供との会話のように、一連の問いかけと返事は文化的に適切だが、実際どの程度の情報が交換されているのだろうか。本質的にはまったく交換されていない。なぜ人々は個人の状態を尋ねられた時にその情報を与えないのだろうか？ほとんどの人は、彼らはただ礼儀正しくしようとしているだけだ、と答えるだろう。これは良い答えだが、おそらく、このような会話にはもっと深い理由があると思われる。

なぜ人々は知り合いと個人的な情報を共有することを躊躇するのだろうか？以前、近況を話したが、話された人はなんの興味も示さなかった。おそらく急いでいたのだろうが、それでも傷つくことであった。他の理由として考えられるのは、かつて近況を話していたころ、それがうわさ話となり、間もなく皆がその人の個人的な話を知っていたからだ。これは恥ずかしく、屈辱的でさえありえただろう。友人と情報を共有する際の信用も失われた。また、こんなことも考えられる。かつてある人が個人的な問題を他の人に話した時、相談された人はその情報を使い、分析し始め、もし、友人が彼（女）自身のことを考えるなら、どのように生活を変えるべきかを指導し始めた。この一連の指示は再び秩序ある生活を送るためには従わなければならない指示だ。もし指示に従わないのなら、相談を受けた友人は、問題を抱える人が問題を気にしないのだと受けとめるだろう。助ける代わりに、『助言』した人はうかつにも問題を抱えた人の人生のまわりに錨を置いたのだ。不幸なことは、助言者は彼が何をしたのかを知りもしないということだ。このことを再吟味してみると、なぜ文化的に正しい挨拶のやりとりは短く気持ち良いのかは明らかだ。この形式では危うくなることは何もない。

この表面的な挨拶への洞察をもってすれば、親と子供との間のやりとりがどのように現在の文化的に受容される形へと発展したかが容易に理解できる。もし子供が、今日はどうだったかという親の問いに、“Not so good.”「あまり良くなかった」と答えたらどうだろう。親は何が悪かったのかを問うだろう。子供が“I’m having trouble with math.”「算数が難しいよ」と言えば、親は問題はなにかを尋ね、子供は“I don’t know. I just don’t get it.”「わからないよ。ただ、理解できないんだ。」と答える。子供のことを気に掛ける親は“Well, instead of going out to play, we’ll take a look at your math book and see what the problem is.”「じゃあ、遊びに出かけるかわりに算数の本を見て、何が問題なのか調べようね」と言う。子供は“Hey, I want to go out and play. I’ve been in school all day. Can’t we take a look at it later? Anyway, I think I understand it now.”「ええっ！僕は外に遊びに行きたいんだよ。一日中学校にいたんだ。後で見ればいいでしょ？とにかく、算数はもうわかったよ。」と言う。親は強い態度をとり、子供に算数を見してみる方が大切で、それから遊びに行くように言う。

このやりとりを見てみよう。確かに親は親切心から、子供を助けようとしている。しかし、子供にとっては、助けの申し出はむしろ懲罰のように聞こえるのだ。外で遊ぶ代わりに、彼らはさらに多くの学校の勉強をしなければならないのだから。親は助けの申し出の影響に気づいておらず、子供がなぜ反抗するのかがわからずに困っている。断固とした態度が必要だと思い、親は子供を部屋にとどめ、助けを受けるように『強いる』。子供は憤慨し、悪い態度をとる。親は、助けの申し出が拒否されたように感じ、子供の反抗への忍耐が失われていく。とにかく子供は部屋にとどまり、算数の本を持ってくる。状況をコントロールしていると感じ、その状況に満足している親は、算数の本を見、何が問題なのかを聞く。子供は“I don’t get division of fractions.”「分数の割り算がわからない」と言う。親の顔はうつろになり、赤く変わる。分数の割り算のやりかたを覚えていないのだ。親は困惑と自分自身への不信で打ちひしがれ、教えられないという状況を恥ずかしいと感じる。子供は、親が分数の割り算のやり方を覚えていないということを知って驚き、また、困惑する。実際、このことは子供にとって、親が自分を助けられないという初めての経験かもしれない。この状況への反応は多様であるだろう。しかししたい場合、長期的な反応は最初に挙げた、文化的に容認された決り文句に従うことだろう。

“How was your day?” 「今日はどうだった？」

“Fine.” 「よかったよ。」

“How was school?” 「学校はどうだった？」

“Good.” 「よかったよ。」

“What did you learn?” 「何を習ったの？」

“Nothing.” 「何にも。」

“Great, have a good time playing, and make sure you do your homework before you go to bed.” 「それはよかった。遊んできなさい。寝る前に宿題をするのを忘れないでね。」

この一連のやり取りは安全だ。実在する問題に会話が進展する隙を与えない。隠し立てしないがためにおこった気まずい経験から、ほとんどの人は礼儀正しく、意味のない上記のようなやりとりを受け入れるようになる。正気の子供なら、誰も遊びに行けなくなってしまうようなことを言わないだろう。

別のレベルで、なぜこれらの文化的に受け入れられている応対が今の形なのかを把握することが大切だ。確かに、多くの人々はお互いがどうしているかを共有したことがあるが、事はより複雑だ。対人関係のやりとりでの質問と答えがうまくいっていないのだ。名前や住所、職業を尋ねれば、するすると答えが返ってくる。しかし個人的な質問を尋ねると、答えはいていねいだが、大抵意味がない。個人的な質問に対して保護的である理由として、上に挙げたものの他に、別の側面がある。

上に挙げた親子の会話と子供の算数への不満への努力では、コミュニケーションの原動力は科学の『作用、反作用』の原則によってコントロールされているといえる。なぜなら彼らはテクノロジーイングリッシュを使っているからだ。問題解決の方法である質問と答えは、たとえ愛情と配慮が動機だったとしても、親子を拒絶と憤りの感情へと導くのだ。

科学的研究のために作られたこの言語形式は、理解の形式を確立するために、扱われている題材を分極化させる。分極化は科学者に、主題を評価し分析することを可能にさせる。分極化は我々に、主題を計測し等級をつけることを可能にさせる。熱い・冷たい、高い・低い、内・外、固体・液体・気体、暗い・明るい、等の分極化がない限り、定義の不足が生じるだろう。主題の分極化はその特質を理解するのを可能にさせる。例えば、以下のものを、分極化を使って解いてみよう。それは丸く、四角くはない。それは押した時に転がり、滑らない。それは落とした時に弾み、壊れない。それは何だろう？ボールだ。この過程では、テクノロジーイングリッシュはとてもうまくいく。この言語を人間関係に用いた時、何が起こるかを次の例で見よう。

友人を助けようとしている例では、一人が一連の質問をし、収集された情報から解決策をまとめる。助言者は、友人がその解決策に従うことを期待している。助言者は、他人を思いやる立場からそれをしているが、助言を受けた人は、従うことが期待されている解決策はもしかしたら適切ではなくむしろ重圧と感じるかもしれない。さらに言えば、その人は友人に解決策を求めたのではなく、ただ聞いてほしかったのに、と感じることも考えられる。友人がただ聞いてくればよかったのに、と思いつつ、分析されたので、その人はやりとりの前よりもいっそう気分が悪くなり得るのだ。友人は普段どおりに、現存する言語形式であるテクノロジカルイングリッシュを用い、質疑応答により問題解決を続け、分極化を試み問題を理解しようとする。分極化を通して、人は難解なことの要因を『理解』し始め、その存在範囲と境界線、硬直しているか流動的なものかもしくは存在すらしていないのか、がわかると信じている。何が起こっているかを理解するための問題解決・関係の分極化は他人への判定や批判、期待を生み出す。人間関係における問題解決・関係の分極化は距離と疎外を生み出すのだ。

我々は皆、受け入れられている方法で英語を話すよう育てられてきた。自国で生まれた者は誰でも、正しい方法で話すように手ほどきをうけている。『正しいやり方』は、親や学校の先生を模範として形成される。教えられる文章の効果に疑問をもつ者は誰もいない、が、以上の例から、なぜ個人の性質に関する質問は答えるのがとても難しいかがわかるだろう。これを理解していれば、もし人が他の人がどうしているかを本当に知りたいのなら、“How are you doing?” 「どうしてる？」という質問はまずしてはならないことであるという結論に達するだろう。テクノロジカルイングリッシュは、データの収集、データの計算、可能な解決策の供給といった科学の領域における問題解決に有効な一方、個人の性質に関する人間関係の伝達手段としては無効だと思われる。そのため、人間関係をうまくいかにさせる効果がある独自の文章をもったパーソナルイングリッシュプログラムが発展させられる必要があるのだ。

以下に挙げるパーソナルイングリッシュは、調和的な人間関係を促進する言語形式として提案されているものだ。

この言語形式を論証するために、親が子供を学校に迎えに行くときの例で、親がパーソナルイングリッシュを使うとどうなるかを見てみよう。

親が子供を学校に迎えに行き、言う。“It looks like a lot has been happening. A lot has been happening with me today. After I dropped you off this morning I went to the store. They were having a special on chocolate chips, so I bought a few bags and thought it

would be fun if we made cookies sometime soon.”「色々あったみたいね。私も今日は色々あったわ。今朝、〇〇ちゃんを送ってから、お店にいったの。そしたらチョコレートチップスが安売りだったからいくつか買ったわ。そして近いうちに〇〇ちゃんとクッキーをいっしょに作れたら、楽しいだろうな、と、考えたのよ。」

子供は満面に笑みをたたえて見上げ、尋ねる。“Can we make them today?”「今日作れる？」

親が言う。“That would be fun. Maybe after you go out to play, we can make them when you come back in.”「それはいいわね。そうね、あなたが遊びに行って、帰ってきたら作りましょう。」

子供は同意して言う。“You know a lot happened at school for me. I was able to share about the garden we are growing, and the teacher asked if we could take a picture and bring that in to share next week. But, I did have some trouble later in the day. The teacher was mean.”「僕も学校でいろいろあったんだよ。僕達が作っている庭のことを皆に話したんだ。そしたら先生が写真を撮って皆に見せるために来週持ってきてくれないか、って言ったんだよ。でも午後にはいやなことがあった。先生がいじわるだったんだ。」

親が答える。“Gee, that must have been upsetting.”「まあ、それは大変だったわね。」

子供は親を見、言う。“Yeah, it was. She called on me to answer a question, and I didn't know what to say.”「そうなんだよ。先生に指されたとき、何て言ったらいいかわからなかったんだ。」

親は聞き、言う。“Not knowing the answer can be embarrassing.”「答えがわからないのは、ぼつが悪いわね。」

子供は少し考え、言う。“Yes, it was. She told me that if I had been listening, I would have known the answer. I told her I had been listening, but I just didn't get it.”「そうだよ。先生は、もしちゃんと聞いていたら答えがわかるはずだって言うんだ。僕は聞いていたけど、ただわからないって言ったんだ。」

親は励ますように言う。“This really sounds confusing.”「それはとても困ったでしょう。」

子供は同意し、言う。“When I told her I was listening, that I just didn't get it, she got upset, telling me that I was talking back. I told her I wasn't, and she said I was, and then she told me to go to the time-out room and remain there until I knew how to behave. So I went to the time-out room, and everyone was laughing at me. What should I do?”「僕が先生にちゃんと聞いていたけどただわからない、って言った時、先生はおこって、

僕が口答えをしている、って言うんだ。僕はしてない、って言ったけど、先生はしてる、って言うんだ。それから先生は僕に反省室に行って反省するまでそこにいろ、って言うんだ。だから僕は反省室に行って、みんな僕のことを笑ったんだよ。僕はどうすればいいんだろう？」

親は少し考え、言う。“This is a tough situation. It is hard to know what to do. I'll have to give it some thought.”「これは難しい状況ね。どうしたらいいかわからないわ。少し考えさせて。」

この会話の最後で、子供は親に“**What should I do?**”「どうすればいいんだろう？」と、指導を求める。親は“**Why don't you speak with the teacher?**”「先生と話したらどう？」などという一般的で文化的な回答に飛躍していない。この回答は子供の状況を解決するには見えず、多くの人が気まずさを感じるだろう。「先生と話したらどう？」という問題解決型の回答の効果を見てみよう。アメリカ国内の子供の何人が、先生と話しに行くだろうか？おそらく一人もいまい！この回答の結果は、子供が実行不可能な使命を与えられることで、次回親に会い、親に“**So, how did it go with speaking to the teacher?**”「先生と話してみて、どうだった？」と聞かれたとき、わなにかかることになる。もし行かなかったと答えたら、それが実際には実現性がなかったことだったにしても、子供はさらに親からのプレッシャーを受けることになる。それは親の失望から自己主張する必要性についての非難まで、いく通りもある。親は、親の期待が通りに子供が動かないないことが続くため欲求不満となり、子供にその矛先が向けられることになる。ずっと聞き役に徹していたにもかかわらず、子供の「どうすればいい？」という質問に答えたがために、その結果は信頼感を蝕む結果となってしまうのだ。

要するに、人間関係のたぐいの質問に答えることは、良かれと思って言ったことにもかかわらず悪い結果を導くことが往々にしてあるのだ。経験から得たよいやり方は、質問をせず、また、答えないことである。うまくいかないからだ。どうすればよいかと質問された時には、感情を共有した方が、より良い結果を導く。親が、子供の状況が困難だと認めることは、質問へは直接答えていないが、少なくとも、子供にとって無理な親の期待が生じることがない。子供は親に支えられていると感じ、親は子供の窮地を共有し、そうすることにより、きずなが生まれるのだ。

親子間で感情が完全に共有されたきっかけは、親がパーソナルイングリッシュを用いたことにある。親は、子供に“**How are you doing?**”「どうしてる？」などと決して尋ねない。その代わりに、親はまったく珍しい会話の始め方をした。“**It looks like a lot has been happening. A lot has been happening with me today.**”「色々あったみたいね。お母さんも今日は色々あった

わ。」親は子供に何が起こったかを話し、子供は親に何が起こったか話し始めるのだ。親は新しいやり方で話を聞く。質問はひとつもされておらず、むしろ親が子供の感情に触れていることを表すような言葉をかけた。その結果、子供は励まされ、より多くの話がされた。

話を聞くことと質問して問題解決しようとする事との間には決定的な違いがある。質問は会話における権限を質問者に移行する。質問者は何が起きたのかを知るために会話の支配権を得、質問を通じてやりとりを指揮する。あいにく、質問される者は、コントロールを失ったと感じるので、当然子供はそう感じ、自己防衛の感情が生じるのだ。

テクノロジカルイングリッシュでは、先生がいじわるだ、と子供が言えば、親は当然“**What happened?**”「どうしたの？」と尋ねるだろう。子供はおそらく“**I don't know.**”「知らないよ」と言うだろう。この返事は子供にとっては当然の返事だが、それでも親を驚かさだろう。そして親は詳しい状況を知るためによりいっそう激しい質問をし始めるだろう。親は、“**What do you mean you don't know? Did you do something you shouldn't have done?**”「知らないって、どういうことよ？しちやいけないことをしたの？」と言うだろう。

質問することの問題は、会話でのコントロールを失うことにより、子供がただちに圧倒させられ、自己防衛的になることである。実際、『**どうしたの？**』という問いは、子供は決して『**何が起こったのか**』という意味では聞いていない問いなのだ。代わりに、“**What did you do wrong?**”「何、悪いことしたの？」というような問いに聞こえる。子供の世界では、子供と先生の間で何か問題があるときはいつでも、普通の親はたいてい子供が何か悪いことをしたと決めてかかるものなのだ。“**What**”「何」から始まる質問を聞くとき、子供はその質問が最終的に向かう行き先へと飛び、それは“**What did you do wrong?**”「何、悪いことしたの？」となるのだ。何も悪いことはしていないと思いながら、子供は“**I don't know.**”「知らないよ」と言う。これは子供が聞いたと思った質問に対しては正しい答えだが、親が実際尋ねた質問には間違った答えなのだ。親は子供が質問をちゃんと聞かなかったことがわからず、また、子供もちゃんと親の質問を聞いていなかったことがわからないので、当然混乱が行き渡る。我々の多くは、我々が言うことの多くはきちんと聞かれず、我々が聞いたと思ったことは実際には言われていないことが多いということを知っている。しかし、会話の最中は、そのことを覚えていられない。もし我々がこの原理を覚えていられれば、ほとんどの会話はより気配りした方法で発展するに違いない。

個人的な関係において感情を共有する場合、データを集める必要はないので、質問は不適切で

、よく聞くことが求められる。子供が親に、先生がいじわるだったと話す時、親は文化的に、自動的に問題解決をし始める。表面的には、問題は先生がいじわるだったことだが、子供にとって問題なのは、気を転倒させるような経験をしたことである。親の役目は、子供のかき乱された感情に近づくようにすることだ。この状況でのよく聞くこととは、他の人がどう感じるかを自分に問いかけ、相手によく伝わるパーソナルイングリッシュを用い表現できる感情を描写することだ。親が“**That must have been upsetting.**”「それは気が動転したに違いない。」と言えば、子供は会話のコントロールを持ちつづけながら、親の同意を得、励まされたと感じる。子供は自分の感情が聞かれ、その際の親密度から、もう大丈夫だというメッセージが送られている、ということを感じ取っている。安心感とコントロールを持ちつづけているため、子供はより多くのことを話す気になるのだ。しかし、人の感情を聞くことは少しの期待ももたないことが前提とならなければならない。もし子供が、感情がこもった親の言葉に“**Yes, it was upsetting.**”「そうなんだ。大変だったんだ。」と返答し、その後何も言わなくても、それはそれでよいのだ。なぜなら、感情をよく聞く事はなんの期待も伴わないからだ。パーソナルイングリッシュを用いながらよく聞くことは、信頼、確信、支持、奨励、配慮、思いやりや尊敬の感情といった、親がテクノジカルイングリッシュを使って文化的に答える時に本当に伝えたい感情全てを伝えさせるのだ。

テクノジカルイングリッシュでは、感情を表す語彙はあるが、ただ、それらの言葉を利用する文章がないのだ。科学またはビジネスのテクノジカルイングリッシュが盛んな分野では、感情は不必要だ。研究員はアカゲザルが実験に使われることについてどう感じるかなど、尋ねたくない。ビジネスマンが土地を開発する時、彼らはその土地の植物や動物が破壊されること、もしくは未来の購入者の『福利』のために展示されることについてどう感じるかなど、尋ねたくない。親は子供の学校に行かなくていいかという懇願に答えたくない。多くの問題を引き起こすからだ。次の例は、感情を抑制させる科学技術の力についての最も明快な例だ。健康な人は誰も有毒なごみ捨て場の隣りに住みたいとは思わないだろう。しかし、都市環境にある全ての人はずうしている。駐車場や道路は何からできているのか？アスファルトだ。アスファルトとは何だ？ガスが作られる過程でできる残留物だ。この残留物、すなわち有害廃棄物は住宅街の道路を塗り固めるアスファルトを作ることにより再利用されている。この有害廃棄物は、いったんアスファルトと呼ばれ、驚くほどすばらしく道路に塗られ、その輝かしい黒い面に鮮やかな黄色い線が引かれた上を我々の車がとてもスムーズに走る時、我々におおいなる満足感を与えるのだ。もちろん我々は塗られたときの臭いは好きではなく、また、この時点でアスファルトは有毒だとわかるわけだが、通りすぎるときには息を止める。しかし、科学の力と感情の抑制をもって、我々はこの有毒性を認めず、むしろそれがもたらすものを称賛するのだ。

適切な認識があり、我々が感情を抑制しなければ、アスファルトは禁止された物質だったのだ。

一方、パーソナルイングリッシュは、他の人と調和できるように、相手の感情に近づける文章を作れるよう特別にデザインされている。以下にいくつかの例を挙げた。

1. “How frightening.” 「なんて恐ろしいのでしょうか。」
2. “Gee, how disturbing.” 「まあ、なんて心が乱されることなのでしょう。」
3. “It’s upsetting.” 「気が動転するね。」
4. “It feels confusing.” 「混乱しそうですね。」
5. “It seems unfair.” 「不公平そうですね。」
6. “I can see how exciting that was.” 「それがどんなにわくわくすることだったか、よくわかります。」
7. “That must be confusing.” 「混乱したに違いない。」
8. “It appears to be delightful.” 「とても楽しそうですね。」
9. “That must be uncomfortable.” 「それは気まずかったに違いない。」
10. “I can imagine that would be surprising.” 「それは驚いただろうと想像できます。」

他の人の感情に近づける文章を発展させるのと同じように、自分自身の感情を表す文章を発展させることが重要だ。以下は個人の感情を表す文章例だ。

1. “I would like to share how confusing this has been.” 「これがどんなに混乱させるようなことだったかを共有したい。」
2. “I feel inadequate, and this really “bothers” me.” 「自分が不適當に感じ、このことは本当に悩みの種です。」
3. “I’m unsure of what’s happening.” 「何が起きているのか、私には確信がありません。」
4. “I can’t help but to feel overwhelmed in this situation.” 「この状況では閉口させられるしかありません。」
5. “I hate to feel depressed.” 「憂鬱になるのは大嫌いです。」
6. “This has been really tough for me.” 「これは私にとって本当に辛いこととなっています。」
7. “I think I have lost it today.” 「今日はかっとなってしまったようです。」
8. “I can’t believe I feel so distressed over this.” 「このことでこんなにも苦しむなんて信じられません。」

9. “It has been very satisfying for me today.” 「今日はとても満ち足りた日でした。」
10. “I hope that I can feel meaningful in this relationship.” 「この関係で自分が有意義に感じられることを願っています。」

これらの感情を表す文章は、パーソナルイングリッシュの核心なのだ。

人々が、テクノロジカルイングリッシュは科学技術の問題解決のために発達させられたということを知らずに、それを無理やり使われないようにすることは大変重要だ。自覚と選択力をもって、今や人々は、健全な人間関係を促進し助長するためにデザインされたパーソナルイングリッシュを用いることができる。これを土台として、問題解決がやわらげられ、感情を表す言葉と共に使われるとき、それは他の人々との関係改善に向けて、人々の要求を満たすのだ。パーソナルイングリッシュは評価、理解、信頼、支持、尊重、そして感情を共有する時に最も大切なもの - 安心感を促進する。パーソナルイングリッシュは感情への痛手を癒す助けとなる。自分の感情を安心して共有できるとき、人は気分よくなるものなのだ。

二つのプログラムが溶け合わさった時、調和のとれた意思疎通がもたらされ、技術の力は、遂に、自覚ある人間が促進させようとしていた人間らしい要素を得ることができるのだ。